

神は「一」「真」「善」などの完全性を指し示す「概念」を用いて、肯定的に語られようとエックハルトはみなすのである。この観点に従えば、完全性を指し示す「概念」はもはや、被造物における完全性の不完全な認識から帰納的に導き出されたものであるという一般的な「概念」としての意味を失い、それは我々の認識と言語を超えた完全性そのものを直接的に指し示す「超越的概念」として用いられるのである。つまり、神に関する肯定的言述は、我々の認識と言葉における限界性に着目する認識論的観点を完全に排除し、「概念」それ自体を超越化させることで可能になるのであり、それによって神における存在論的超越性が肯定的に言述されるのである。

このように、エックハルトは、我々の認識と言語の機能的限界を十分に自覚しながら、それにも拘らず、我々が「言葉」を用いて神について語ることを、否定的言述と肯定的言述という二つの仕方でも可能と考えていることが明らかになった。

### エックハルトの「永遠」理解

——Pantheismusの観点から——

田島 照久

エックハルトの神学は汎神論的色彩を持つと一般に言われている。汎神論 Pantheismus という用語は、イギリスのトールランド以来、神と世界との関係を断絶的ではなく、同一ないし連続的に捉えるところに有神論から分かち主なる特徴があるとされる。スピノザの再評価につながった一八世紀の所謂汎神論論争を経て、一九世紀初頭 K・C・F・クラウゼは万有(内)在神

論 (Pantheismus) を提唱した。万有在神論は現代のホイットヘッドを経てプロセス神学に受け継がれ理論化されている。現代のプロセス神学の中心的研究者であるチャールズ・ハーツホーンは歴史的神概念を E 永遠的、T 時間的、C 意識的、K 全知的、W 世界包括的、という五つの要素の組み合わせによって分類を試みている。これらの要素一切を持つ神概念すなわち ETCKW が万有在神論であるとする。万有在神論の神とは、永遠的・時間的な意識としての至高者であり、世界を知り、かつ包含する神ということになる。

神は永遠的でありかつ時間的であるという、形式論理における矛盾律に抵触する問題については、矛盾律は、同じ存在において相反する限定の共存を妨げない、ただ対立概念が保持する局面を区別するだけでよいとする「両極性の原理」に依拠して理解しようとする。もし有神論が、神は独立のかつ原因であった、全包括的ではないと主張し、汎神論が、神は、全包括的であつて、独立的ではなく、おそらく原因でもないと主張すれば、この二つは、極端に対立し合った理論ということになるが、しかし原因は、その結果に、必然的ではなく、蓋然的に、関連するものと考えられている現代の科学的知見に基づけば、原因の存在には、多少とも起こりそうな諸結果の集合のうち、そのある一つは存在すべきだという意味が含意されているにすぎないことになる。この「中庸的」(moderate) 因果必然性から理解すれば、神の實在 (existence) は、確かにある一つの世界の存在を不可避なものにするが、まさにこの特定の世界を存在させることについては、単なる可能性の域を出ない。神は、特

定のどのような世界からも独立しているが、世界自体から独立するということはない、ということになる。万有在神論の立場では、世界に対する神の独立性と依存性が、神と世界の異なる局面において同時に成立することになる。

エックハルトの神論では神は、E永遠的、C意識的、K全知的ではあるが、問題なのはT時間的と、W神は世界包括的、という要件を有するかどうかである。エックハルトは、「神は唯一の、すなわち同一の単一の働きによって、しかも永遠においてと同時に時間において働いているのであり、このようにして神は永遠なものと同時に時間的なものも、非時間的に生じせしめるのである」と語り、「神は、すべての被造物の内にある。それらが存在を持つかぎり。しかし一方でそれらを超えているのである。神がすべての被造物の内にあるというまさにそのことによつて、神はそれらを超えているのである。何人かの師は、魂は胸の内にはかかないと考えているが、それはそうではなく、魂はそのまま、分けられることなく、完全なまま足の内に、あるいは目の内に、そしてどの体の部分にもあるのである」とし、さらに「わたしの体がわたしの魂の内にもあるのだといえる」と語る。

ハーツホーンは「被造物への神の直接的作用を考えるには、精神と身体、ないし精神と神経細胞というアナロジーに頼る以外にはない」として「われわれの各々が、身体と呼ばれる細胞の社会から成る超細胞的な固体であるように、神もまた、被造物を包括する社会から成る超被造物的個体なのである」とエックハルトと同様なアナロジーで説明している。Tの要件をどう

見るかだが、エックハルトの神概念は汎神論ではなく、ハーツホーンの分類するプロセス神学の万有在神論に近いものであるように思われる。

「推測」と〈否定神学〉——クザーヌスの所論をめぐって——

島田 勝巳

クザーヌスの『知ある無知』と『推測論』の関係性をめぐっては、かつてJ. Kochが、前者を *Seinsmetaphysik* として、また後者を *Einheitsmetaphysik* として、両者の根本的な差異を指摘した。近年でも K. Flasch がこの「コッホ・テーゼ」を継承しながら、クザーヌスの思想的展開を詳細に跡付けている。本発表では両著作の関係性をめぐるところとした議論を踏まえたうえで、後者において提示されたクザーヌスの「推測」(*conjectura*) の概念を、前者から継承された〈否定神学〉的言説の展開として捉え直してみたい。こうした視点は、両著作の差異や断絶よりも、むしろそこに一定の連続性を見出そうとする理解である。

クザーヌスの〈否定神学〉的思考の核心は「知ある無知」の洞察、つまり「もの」(*res*) の「真理」・「何性」の厳密な把握可能性をめぐる思考にあると考えられるが、推測の概念も基本的にはその延長線上に位置づけられていると見ることができ。だが一方で、『推測論』では真理についての推測が「二性」(*unitas*) と「他性」(*alteritas*) の相互媒介性によつて提示され、それが議論の全体の枠組みを成している。

クザーヌスによれば、「推測とは他性を伴いつつ、真理その